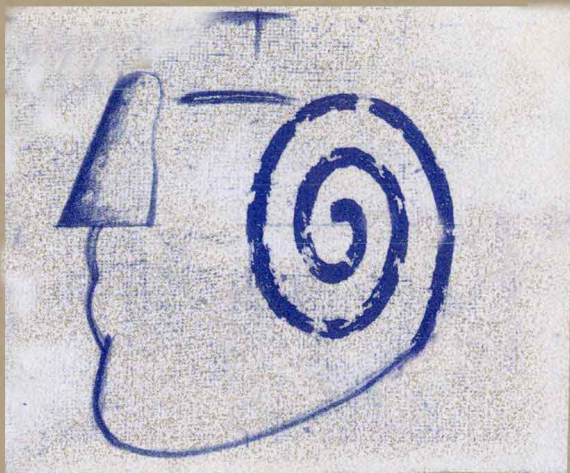


ダン・ミルマン 上野圭一訳

やすらぎの戦士

Dan Millman
WAY of the Peaceful Warrior





やすらぎの戦士

ダン・ミルマン

上野圭一訳

筑摩書房

やすらぎの戦士

一九八七年三月三十日 初版第一刷発行

著者 ダン・ミルマン

訳者 上野圭一

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京神田小川町二の八
振替東京六一四一一二三
電話東京(二九一)七六五(営業)
(二九四)六七二(編集)

印刷所 三松堂印刷

製本所 鈴木製本所

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替え致します。

目次

あなたに

プロローグ

虹のふもとのガソリンスタンド

第1部 変化を告げる風

1 突然、魔術のように

2 まぼろしの罫

3 追い風に乗って

第2部 戦士のトレーニング

4 剣は磨かれた

9 7

133 103 73 51

5 険しい道

6 へいまここへに生きるよろこび

第3部 至上の幸福

7 最後の彷徨

8 扉はひらく

エピローグ

風の中の笑い声

解説

訳者あとがき

吉福伸逸

上野圭一

229 197

277 255

297

311 303

装画
室越健美

やすらぎの戦士

WAY OF THE PEACEFUL WARRIOR

by Dan Millman

Copyright ©1984 by Dan Millman

Japanese translation rights arranged

with H. J. Kramer, Inc., Tiburon, California,

through C+F Communications Inc., Tokyo.

あなたに

一九六六年の一二月はじめ、カリフォルニア大学バークレー校の三年生だったぼくの身の上につきつぎと突拍子もないことが起こった。夜中の三時二〇分、ある終夜営業のガソリンスタンドでいきなりソクラテスに出くわしたのがすべての発端だった（本名を明かさないその男と最初の一夜を過ごした別れ際に、何気なくぼくが古代ギリシャの賢人の名でそう呼びかけ、本人もまんざらではなさそうだったので、いつかその名が定着してしまった）。深夜の偶然の出会いとそれにつづく数々の冒険。それがぼくの人生を一変させることになったのだ。

一九六六年までのぼくの人生は、考えてみれば幸運の連続だった。ゆとりのある家庭で愛情豊かな両親に育てられ、大学に入ってから、ロンドンで行なわれた世界トランポリン選手権大会で優勝し、ヨーロッパ各地に遠征して、多くの人の賞賛を得るようになった。しかし、人生はぼくに応分の報酬をくれてはいたものの、永続するやすらぎや充足をくれたわけではなかった。

いまでは、ぼくにもわかつている。のちに師となり友となったソクラテスに出会うまで、ある意味でぼくは生まれてからこのかたずっと眠りこけ、ただ目覚めている夢を見ていただけだったのだ。それ以前のぼくは、豊かで楽しく分別ある人生こそ自分の人間としての生得権であり、それらは時がたつにつれておのずからあたえられるものだとして信じて疑わなかった。いまさらへいかに生きるべきか

を学ぶ必要があるなどとは考えもしなかった。まして、夢から覚めてごく当たり前の幸福な生活を送るためにマスターすべき特別な修行や「へ世界の見方」があるなどとは、それこそ夢にも思わなかった。ソクラテスは自分の生き方、つまり「へやすらぎの戦士の道」を身をもって示すことによって、ぼくの生き方の誤りを明らかにしてくれた。ソクラテスは、ぼくが彼と同じように智慧と慈悲とユーモアの目でこの世界を見るようになるまで、深刻で気ぜわしく込み入っているぼくの生き方をたえずからかい、挑発しつづけた。そして、ぼくが戦士として生きることの意味を自力で見つけるまでは、決してその挑発の手をゆるめなかった。

彼のそばに座って話に耳を傾け、議論し、思わずつりこまれて大笑いをしているうちに白々と夜が明けてきたことが何度あっただろう。この物語はそんな体験にもとづいてはいるが、小説のつもりで書いた。ぼくがソクラテスと呼んだ男は実在の人物だ。でも、ソクラテスは世界と溶け合う術を心得ているので、正確にどの時点で彼が姿を消して、他の人生の師たちや人生体験とすり替わったのかはこのぼくにも定かではない。また、会話の内容や時間の前後関係を勝手に入れ替えたり、ソクラテスがぼくに伝えようとした教訓に色を添えるために、物語のあちこちに逸話や隠喩をちりばめたりもしている。

人生とは、いのちとは、ただ個人に属するだけのものではない。物語や教訓は誰かと共有してこそ、はじめて役に立つものになる。だからぼくは、人のところにしみとおるような師の智慧やユーモアをあなたと共有することによって、わが師を讃えることにした。

プロローグ

虹のふもとのガソリンスタンド

「人生の開幕だ」古ぼけて白い塗装がすっかり色あせた愛車のヴァリアントの窓から父と母に手をふってアクセルを踏みこんだとき、ぼくはそう思った。車には、はじめての大学生活に必要なものが詰めこんであった。ぼくは力に満ち、独立心にあふれ、それこそ何でも来いという心境だった。

カーラジオから聞こえる音楽に合わせて鼻唄を歌いながらロサンゼルスフリーウェイを一路北に向かつて飛ばし、ブドウ畑が見えたあたりでルート九九に乗り換えると、あとはサンガブリエル山脈のふもとにつながる緑一色のなだらかな農場地帯をどこまでも走りつづけた。

夕闇がせまる直前、オークランドの丘から曲がりくねった道をくだる途中でサンフランシスコ湾がかすかにきらめくのが見えた。パークレーのキャンパスが近づくにつれて、胸のときめきはだんだん高まっていった。

めざす寄宿舎に着くとすぐに車から荷をおろし、遠く窓外に見えるゴールデンゲイト・ブリッジとサンフランシスコの夜景を眺めた。

五分後、ぼくは早くもテレグラフ・アベニューを歩きながら居並ぶ店のウィンドーをのぞき、さわ

やかな北カリフォルニアの空気を吸いこみ、小さなカフェから漂う香ばしい匂いを嗅いでいた。それらすべてのもので胸がいっぱいになったぼくは、庭園風に美しく設計されたキャンパスの小道を夜中すぎまで歩きまわっていた。

翌朝は朝食もそくさにすませ、ハーモン体育館へと急いだ。この体育館こそ、チャンピオンになるという夢を実現するために、その後ぼくが週六日のトレーニングに励み、四回も捻挫し、連日長時間にわたって汗だくになりながら宙返りの練習をしたところなのだ。

二日もたつと、ぼくは人間と書類と講義時間割りの洪水に流されて溺れかかっていた。しかし月日は順調に流れ、おだやかなカリフォルニアの四季のように、ゆったりと移り変わっていった。授業のほうは何とかやり過ごし、体育館では大成功をおさめた。ある友人からは「生まれつきの軽業師」と言われた。整った目鼻だち、短く刈りこんだ褐色の髪、細身で屈強な肉体。確かにそう言われてもおかしくはなかった。昔から向こう見ずな離れわざが大好きで、子供のころから危険な遊びを楽しむような性分だった。興奮と確実な手応えとしたたかな満足感が得られる体育館という場所は、いつしかぼくの聖域になっていた。

二年生の終わりに、ぼくはアメリカ体操連盟の代表選手としてドイツ、フランス、イギリスに遠征した。世界トランポリン選手権では優勝してチャンピオンになった。自室の片隅にはトロフィーが山と積まれ、大学新聞の『デイリー・キャル』にはぼくの写真がよく掲載され、キャンパスではちょっと注目される有名人になっていた。女の子たちは色目を使ってきた。美人のほまれ高いショートカットのブロンドで、歯磨のコマーシャル顔負けのきれいな笑顔の恋人、スージーがぼくの部屋に愛の訪問をする回数はますますふえていた。何と、勉強のほうもうまうまうしていた！ ぼくはほとんど

有頂天だった。

ところが、三年生になった一九六六年の初秋、それまで何となくぼんやりとくすぶっていたものはっきりしはじめた。寄宿舎を出て、家主の家の裏手にある小さなアパートで独り暮らしをはじめたころだった。その前後から、ぼくはもの思いに沈むようになっていた。望みはすべてかなくなっているというのに、どうにも気が塞いでくるのだ。やがて、悪夢を見るようになった。毎晩とっていいほど、汗びっしょりになって突然飛び起きるのだ。夢はいつも同じだった。

暗い街路を歩いている。闇に渦巻く霧の中から、突如、出入口も窓もない高いビルディングが浮かびあがる。

背の高い黒衣の人影が大またで近づいてくる。よくは見えないが、なぜかそれがいかにも冷酷な死神であることを、ぼくは知っている。ほの白い頭蓋骨にぼっかりとあいた暗いふたつの眼窩が、死の世界のような沈黙のままぼくをじっと見つめるのだ。白骨の指がびたりとぼくを差し、白い指関節が鉤型に曲がってぼくを招く。ぼくはその場に釘づけになる。

黒頭巾の亡霊のうしろに、白髪の男があらわれる。その顔はおだやかで、潑刺としている。歩いても足音ひとつたてない。ぼくはなぜか、死神から逃れるにはその男に頼るしか方法はないと感じる。その男ならぼくを助ける力がある。でも、その男はぼくを見ようともしないし、ぼくも声ひとつ出せない。

ぼくの恐怖をあざけるかのように黒衣の死神はぐるぐると旋回して、はたと白髪の男と向かい合う。白髪の男が豪快に笑う。ぼくは度胆をぬかれて見守る。怒り狂った死神が男につかみかかる。つぎの

瞬間、死神はもんどり打ってぼくの近くまで飛ばされる。男が死神のマントをつかみ、空中に投げ飛ばしたのだ。

死神の姿がかき消すように見えなくなる。白髪の男はぼくを見ると、両手をひろげて歓迎のしぐさをする。ぼくは彼のほうに歩みよるとそのまま彼の中に入りこみ、溶けて彼のからだになつてしまうふと気がつくと、ぼくは黒いマントを着ている。伸ばした両手は漂白したような白い骨だけで節くれだち、それが祈りのかたちに関わり合はれる。そこで、小さく叫んで目を覚ますのだ。

一二月初旬のある晩、ぼくはベッドに横になって、アパートの窓ガラスの割れ目を吹きぬける荒涼とした風の音を聞いていた。眠れそうもないので起きあがり、着古したジーンズとTシャツを身につけ、スニーカーをはき、ダウンジャケットを着こむと、夜の街に出て行つた。午前三時五分だった。

当てもなく歩きながら湿気をおびた冷たい空気を胸いっぱい吸いこみ、星空を見あげ、静まり返った街のどこかからときおり聞こえる物音に耳をすませた。寒さのせいか空腹を感じたので、クッキーとソフトドリンクでも買うつもりで終夜営業のガソリンスタンドに向かつて歩き出した。両手をポケットに突っこみ、早足でキャンパスを通りぬけ、寝静まっている家並みを過ぎると、行く手にスタンドの明かりが見えた。レストランも商店も映画館も閉まつている暗黒の荒野の中で、そこだけが明るく輝く、蛍光灯のオアシスのようだった。

スタンドの手前にあるガレージの角を曲がったとき、ぼくは危うく暗闇の中にいた男にぶつかって転びそうになった。男は椅子に座り、その椅子の背をスタンドの赤いタイル壁にもたせかけていたのだ。びっくりしたぼくは思わず身を引いた。男は赤いウールの野球帽、グレーのコーデュロイのズボ

ン、白いソックス、日本製のサンダルといういでたちだった。頭上に見える壁かけの温度計が摂氏五度をさしているというのに、薄手のウインドブレーカー姿の男はいかにもあたたかそうに見えた。

男は顔をあげずに、力強い、ほとんど音楽的ともいえる声でこう言った。

「おどかしてすまんな」

「別にいいんだ。ソーダポップのたぐいは？」

「ここにはフルーツジュースしか置いてない。それから、わしのことをポップなどとは呼ばんでくれ」男はぼくを見あげると、ニヤッと笑いながら帽子をとった。雪のような白髪だった。男が豪快に笑った。

あの笑い声だ！ ぼくは呆然としてそのまま彼を見つめていた。夢に出てきたあの白髪の老人だった。白い髪、精悍でしわひとつない顔、五〇代か六〇代のすらっと背の高い男。その男がまた豪快に笑った。すっかり取り乱したぼくはわけもなく「事務所」と書いてあるドアのほうに行って、それを押しあげた。事務所のドアをあげたとたん、異次元につづく別のドアが同時にひらいたような気がした。ぼくは古ぼけた長椅子の上に倒れこみ、身震いしながら思いをめぐらせた。あのドアをあげて、とんでもないものが金切り声をあげながら、いまにもぼくの日常性の中に飛びこんでくるのではないか。しかし、その恐怖感の底のほうには、なぜか心を惹きつけ、奇妙にも魅了するものの気配があるのを感じていた。ぼくは背筋を伸ばして座り直し、浅い息をしながら、何とかそれまでの日常世界にしがみつこうとしていた。

室内を見まわした。そこは、白々しく雑然としたふつうのガソリンスタンドとは大違いだった。ぼくが腰かけている長椅子のカバーは、色あせてもなおカラフルなメキシコ製の敷物だった。左手の入

口の近くには、地図、ヒューズ、サングラスなどがきちんと整理して並べられたトラペラーズ・エイドのケースが立っていた。クルミの木でできた黒褐色の小型机のうしろには、素焼の土色をしたコイデロイのクッションがついた椅子があった。飲料水のタンクが「プライベート」と書かれたドアの見張りをしていた。ぼくのすぐそばには、ガレージにつづくもうひとつのドアがあった。

何よりも異色だったのは、その部屋の家庭的な雰囲気だった。鮮やかな黄色をした毛足の長いじゅうたんが、入口の靴ぬぐいマットの手前まで敷きつめられていた。壁は白く塗り変えられたばかりで、二、三点の風景画が清潔な感じにしっとりとした色を添えていた。照明のやわらかい白熱光がぼくを落ち着かせた。外の蛍光灯のまぶしい光とは好対照だった。とにかく、その部屋はあたたかく、ほどよく整い、安心できる感じだった。

これが予想もしない冒険と魔術と恐怖とロマンスが生まれる舞台になるうとは、そのときのぼくには知るすべもなかった。ぼくはただ「ここに暖炉があったらいいだろうな」と思っただけだった。

やがて乱れていた呼吸がおさまると、落ち着き払うとは言えないまでも、少なくとも混乱からは立ち直っていた。あの白髪の男が夢に出てくる男にそっくりだというのは、どう考えてもただの偶然の一致というやつにすぎない。ぼくはため息をついて立ちあがり、ジャケットのジッパーを引きあげると、颯爽と夜の冷気の中に出て行った。

彼はまだ例のところに座っていた。そばを通り過ぎながらチラッと最後の一瞥を送ったとき、彼の目がかすかに光るのが見えた。それまでに見たこともない目だった。一瞬、泣いているように見え、涙があふれるかと思うと、その涙が閃光に変わった。星の光を反射して光ったようだった。思わず彼の視線の奥深くに引きずりこまれ、そのうちに、夜空の星々は彼の目の光を反射して輝いているだけ